

はじめに（刊行にあたって）

国立大学の法人化（2004年度）以降、6年間の中期目標・中期計画期間ごとに評価を受ける仕組みになっている。今年度は2010年度から始まった第二期中期目標・中期計画期間の最終年度にあたる。2015年度の大学評価・学位授与機構による実施状況に関する法人評価と部局の現況調査に備え、2014年秋に自己点検評価委員会に対し、平成22年度から25年度までの4年間について学部・研究科における教育研究活動の取りまとめをお願いした。

委員長をはじめとする副研究科長等の関係者には、データ収集及び関係資料の作成、分析、執筆、取りまとめに至るまで間の大変な労力を要する作業に対し感謝の意を表す。

本報告書は、生物生産学部及び大学院生物圏科学研究科を対象としている。

生物生産学部は1949年に水畜産学部として設置された後、1979年に生物生産学部への改組拡充を経て、現在の1学部1学科の5コース（生物圏環境学、水産生物科学、動物生産科学、食品科学、分子細胞機能学）による学士課程教育を行っている。一方、大学院生物圏科学研究科は、1968年に農学研究科修士課程として設置された後、1985年に農学研究科（修士課程）と総合科学部を母体とする環境科学研究科（修士課程）が融合して生物圏科学研究科（博士課程）へと改組され、2002年には大学院講座化を行い、2006年の再改組を経て、現在の3専攻（生物資源科学専攻、生物機能開発学専攻、環境循環系制御学専攻）での教育研究を行っている。なお、生物圏科学研究科は2015年に創立30周年を迎える。

学士課程教育では、2006年度から質の保証に資する到達目標型教育プログラム「HiPROSPECTS®」を導入し、附属施設である農場、水産実験所や練習船豊潮丸を有効に活用したフィールド教育を重視した特色のある教育を提供している。

2011年度には、文部科学省の競争的資金による補助事業「理数学生育成支援事業」の採択を受け、研究者養成特別プログラムを新規開設した。また、2013年度には同じく文部科学省の「大学の世界展開力強化事業:ASEAN International Mobility for Students (AIMS) プログラム」に採択され、タイ・カセサート大学農学部ほか3学部との留学交流を開始している。この他、従来から実施しているフィリピンでの海外実習と合わせて、学部生のグローバル教育に力を入れている。

大学院課程教育では、2008年度からの国際サマースクールを継続的に開催し、国際交流協定校から毎年10数名の大学院生を招いて交流を深める一方、英語による専門授業を増やす取り組み、留学生の積極的獲得などでグローバル教育を推進している。学生への経済支援では、リサーチアシスタント（RA）の雇用を研究科長裁量経費により行い授業料半額相当の支援する他、社会人学生へのエクセレント・スチューデント・スカラシップ制度特別枠の設置、遠隔地学生向け通学費補助、国際学会発表旅費支援なども継続して実施している。

国際交流では、2011年アイルランガ大学、ビサヤ州立大学、2014年フィリピン大学ビサヤ校、西北農林科技大学との部局間交流協定を締結（現在16大学）した。これらの締結校とは、「研究科食料・環境国際シンポジウム」の開催を通じて定期的に研究交流や研究成果の発信を行い、研究活動や大学院生の交流を深めるのに役立っている。

本報告書では、法人評価でも強調されている「関係者の期待に込めているか」という視点を重視し、在学学生、卒業生・修了生、彼らの保護者や卒業後の就職先などを対象としたアンケートや懇談会の結果をできる限り評価指標として用いた。加えて、外部評価委員による外部評価を行い、その結果を今後の現況調査や第三期中期目標・中期計画の策定に反映させていくことで、生物圏科学研究科・生物生産学部のより一層の発展を図っていきたい。

平成27年6月

大学院生物圏科学研究科長・生物生産学部長 植松 一 眞